

# フィールドワーク系授業の組み立て

— 学生を引き込み、つなげるために —

## Construction of fieldwork-based learning - to involve and connect students

行木 敬\*

Kei NAMEKI

### Abstract

In recent years, many universities have begun to offer fieldwork-based learning as a liberal arts course that is open to all students. Despite the high educational effectiveness, teachers are also faced with the problem of how to involve students who have little motivation for the region nor its research with the fieldwork. With the prospect of collecting examples of other teachers' efforts, I present my trials and tribulations in this paper, including "field clips", "field comics", "pre-research", "handover PBL" and "fail-able PBL". From those trials and errors I can extract "three connections" to involve students with fieldwork. These are: making connections with residents before the prior learning, connecting prior learning with the previous year's participants' survey results, and connecting deliverables to the online world.

キーワード：フィールドワーク，街歩き，体験学習，PBL，サービslラーニング，地域連携

### I はじめに

学外に学生たちを引率し、観察や調査をさせる「フィールドワーク実習」のような授業や、本学の「サービslラーニング」のように地域イベント等への協力、企画、実施を体験させる授業のことを、本稿では「フィールドワーク系の授業」と総称する。この言葉には、単独の授業ではなくゼミ活動の一環として学外での調査や活動をおこなうケースも含意している。対象地域の人々と連携して進めていくことになるので「地域連携型授業」といってもいいし、学生の体験に重きを置くという意味で「体験型授業」といってもいい。

こうしたフィールドワーク系の授業（もしくは「体験型授業」「地域連携型授業」）が大学教育において持つ効果は、すでに多くの論文によって指摘されている。

たとえば PBL——学生自らが課題をみつけ、調査と検証を試みる「課題解決型学習（Project Based Learning）」を展開する上で、フィールドワーク系の授業は格好の機会となるだろう<sup>1)</sup>。また地域の大人たちとコミュニケーションを重ねることは、学生の視野を広げ、将来のキャリア設計にもポジティブな影響を与える体験となるはずだ<sup>2)</sup>。特に大学の地元地域で行われるフィールドワークについては、学生が地域への愛着を深める効果もあるし<sup>3)</sup>、授業をきっかけに大学と周辺地域のステークホルダーとの連携が深まっていく機会にもなるだろう<sup>4)</sup>。「大学改革実行プラン」などの文科省指針においても、学生自

---

\* 関西国際大学社会学部 地域総合研究所学内研究員

身の能動的な学び（アクティブラーニング）の推進という観点から、また大学と地域社会の連携という観点から、フィールドワーク系の授業の導入が提言されている<sup>注1</sup>。

こうした効果を念頭に、いまや多くの大学がフィールドワーク系の授業を設置するようになっている。この流れはフィールドワークの「リベラルアーツ化」の流れともいえる。

私が学部生だった 1990 年代初頭までは、授業でおこなうフィールドワークといえば、大学から離れた山間部で何日も泊りがけでおこなう「農村調査」のようなものがあるだけだった。その目的は調査や分析にかかわる専門性の高い技術習得にあり、それゆえ対象学生も民俗学や地理学など一部専攻の 3・4 年生に限られていた。これに対し現在のフィールドワーク系の授業は、PBL の展開やコミュニケーション力養成を目的としているため学部学科を超えた多くの学生に、できれば 1・2 年生のうちの参加が期待される授業へと変化している。必修に近い形で実施している大学もあるだろう。授業参加へのハードルを低くするために、また地元地域への愛着心の涵養や大学と地域の連携機会を創出するという目的もあるために、実施場所も大学の周辺地域に限定される。こうした流れを本稿ではフィールドワーク系授業の「リベラルアーツ化」と呼ぶことにする。

フィールドワーク系授業のリベラルアーツ化に私は賛成である。先行研究で指摘された諸効果は、自身の経験に照らし合わせてもみな妥当であり、それらをリベラルアーツ的な科目としてより多くの学生に、より早い時期から提供することに異存はない。

ただその一方で、フィールドワークがリベラルアーツ化することで発生する問題もある。たとえば授業の現場では、地域社会やその調査について何の知識も、そもそも関心すらも持っていない一般学生を大量に指導・引率する必要があるが出てくる。事前学習から成果作成までを 15 週で完結させる必要もあるし、地元地域との連携が視野に入っているなら、そこに亀裂を入れるような失敗も許されない。リベラルアーツ化したフィールドワークは、このように授業として相当に難しい部類に属する。

前述したフィールドワークの諸効果も、すべては学生たちをうまく授業に引き込めた上での話である。リベラルアーツ化に伴ってどうしても発生してしまうモチベーションの低い学生たちを、どうやって授業に引き込むのか。先行研究にあまり言及はみつからないが、この問題はフィールドワーク系の授業の成否にかかわるクリティカルな部分であり、ゆえに現場の教員がもっとも知恵を絞る部分でもある。全国の大学での事例を集積し、うまくいくパターンを、すなわち担当教員の能力や気質によらず、うまく学生を引き込めるような目標設定や内容配置のパターンを抽出し、授業の組み立てのヒントとして可視化していく必要があると私は考える。

そのような展望を念頭におきつつ、本稿ではその手始めとして、この 20 年間に私自身がかかわってきたフィールドワーク系授業を、成功例も失敗例もあわせて紹介していく。成果物には動画やウェブコンテンツも多いため、それらをひとつのウェブサイトにとまとめた。図 1 に示す QR コードをスマホで読むか、あるいはパソコンのブラウザに URL を打ち込むことでアクセスしてほしい。論文中では「資料サイト」という名で言及する。



図 1：資料サイトの URL

<https://kei-nam.com/sites/rri2022/>

## Ⅱ 研究のためのフィールドワークと教育のためのフィールドワーク

### 1. 研究のためのフィールドワーク

私の専門である文化人類学は、フィールドワークに対する考え方が他の学問とは異なるところがある。その確認から話をはじめたい。

私のはじめてのフィールドワークは、1991年、92年にそれぞれ3ヶ月、ニューギニア島のインドネシア側（現在のパプア州、当時はイリアンジャヤ州）の山岳地帯に暮らすダニ（写真1）の集落でおこなったものである<sup>注2</sup>。今後の本格的な調査のための予備調査であったが、当時のイリアンジャヤ州は分離独立勢力とスハルト政権が衝突する紛争地域であり<sup>5</sup>、長期の調査ビザはどうしても取得することができなかった。調査対象をタイ北部、ナーン県の山岳地帯のムラブリ（写真2）に変え、2ヶ月の予備調査を2回おこなったが<sup>注3</sup>、結局再びニューギニア研究に戻り、国立民族学博物館での博士課程では、ニューギニア島のパプアニューギニア側の山岳地帯に暮らすオクサブミンの集落で、1998年から2001年まで、約3年間のフィールドワークをおこなった<sup>注4</sup>。



写真1：ダニ



写真2：ムラブリ

フィールドワークにずいぶん長い時間をかけているようにみえるかもしれないが、これは、文化人類学者が知りたいものが個々の慣習や観念ではなく、それらが関連しあった全体的な体系、すなわち文化であるからである。

別のところで書いたことがあるが<sup>6</sup>、たとえばダニの「父系出自集団」は、実際には親子関係を物象化する精液や血、土地や祖先との関係を物象化する食物や歌、そうしたものを身体に補填したり除去したりする呪術的諸実践として再生産されている。様々な観念や慣習が関連しあった全体的な体系として存在する彼らの生活から、我々の「父系出自」の概念に合致しそうな一部分を取り出してきたとしても、それは我々の側で創り出された意味であり、それを分析してもダニ文化の理解にはつながらない。

オクサブミンの調査で焦点となった「呪術」も同様である<sup>7</sup>。彼らの生活の中から「呪術」だけを記録して帰ってきても意味がない。実践の現場にあったはずの合理性は、全体から切り離された時点で失われてしまう。合理性がみえない諸実践を「呪術」というなら、「呪術」は調査者の切り取りによってこちら側で生み出されたものである。それを分析したところでオクサブミンの文化の理解にはつながらないだろう。

出自や呪術、あるいは構造や境界など、文化人類学の問題や理論は、調査で持ち帰ってきた全体性を分析する時に使うものであって、出発前に調査対象を絞り込むために使うものではない。対象を絞り込

まないように、全体性を持ち帰れるように、文化人類学は「参与観察」という方法でフィールドワークをおこなう。

「観察」とは人々の日常会話の聞き取りである。こちらからの質問に答えてもらうだけならばインドネシア語やピジン語といった公用語で事足りるが、人々の日々の雑談を聞き取るためには村で実際に使われている言語を習得しなくてはならない。オクサプミンでの調査の場合、オクサプミン語の辞書作りと文法の解析で滞在初期の1年は終わってしまった。公用語がそのまま日常語にもなっているようなフィールドであればこうした作業は不要だが、しかし人々の日常を観るためには生活サイクルが一巡する1年間以上の滞在は必須であろう。

また、日常会話が交わされる場に自分の身を自然なかたちで置くためには、村人の生活に「参与」しなくてはならない。オクサプミンでの滞在を始めた時、私は村人と一緒に村に家を建てたが（写真3）、村人の独特の所有概念に基づく<sup>注5</sup>これは私の家ではなく「村人みんなの家」であり、毎晩のように村人が集まってしまった。彼らを食べさせるために、私は日々自分の焼き畑でのタロイモ生産に追われた。調査中は腹が立ったりもしたが、文化人類学の「参与観察」としてはたぶん最大限の効率で仕事が進んでいたのだと、今になれば思う。



写真3：村で自宅を建てる



写真4：アメリカ実習の報告書

## 2. 教育のためのフィールドワーク — 京都文教大学での経験

以上のような「自分の研究のための」フィールドワークに対し、「学生の教育のための」フィールドワークに初めて関わったのは、博士課程を出て、2004年に京都文教大学に助手として就職にした時になる。

当時の京都文教大学には、日本で唯一の「文化人類学科」があり、その目玉として「フィールドワーク実習」を2年次の通年の必修科目として展開していた。資料サイト2-2に並べてある動画は、フィールドワーク実習をオープンキャンパスで紹介するようにいわれた私が作ったものである。このようにアフリカやアメリカ、中国から、北陸、中部、四国など国内外で、当時の大学の授業としてはかなり規模の大きなフィールドワークがおこなわれていた。

実習を企画し、実施責任者となるのは教員である。助手は教員とペアになって、現地での学生指導を手分けして当たったり、事前学習や事後の成果物作成などに苦労している学生を助手部屋で指導したりした。

この経験は、後の自分のキャリアにおいて非常に大きなプラスになった。自分ではなく学生にフィールドワークをさせるために、どんなスケジュールやコースを組めばよいのか、どんな課題を与えたらよ

いのかなどについて、手練手管を磨いてきた人類学者や民俗学者のやりかたを、誰より間近でみることができたのだから。特に私の場合、アメリカ実習担当の坂上香先生には多くを学ばせてもらった。アカデミズム出身ではなく報道番組のディレクターだった方で、そのためかフィールドワークを「取材」ととらえて、結果を世間一般に向けてアウトプットするまでを視野においた実習を組んでいた。後で述べるように、これは現在の私の授業でも強く意識している点である。

アメリカ実習には助手時代の3年間ずっとかかわった。現地での学生指導だけでなく、帰国後の報告書の編集やレイアウトも全面的に任されたため、いわゆる冊子印刷ではなく、サブカル雑誌風に仕上げさせてもらった(写真4)。学生たちも熱心で、春休み中も助手部屋にみんなで集まって作業を続けたものである。

学生たちは、そもそも文化人類学科を選んで入学してきた者たちなので、フィールドワークに対し緊張することはあっても、モチベーションが低い学生はほとんどいなかった。少し背中を押せば自分で現地の人々と話をしてくれた。

### 3. 教育のためのフィールドワーク ― 神戸学院大学での経験

こうした京都文教大学での経験がかなり恵まれたケースであったことに気が付いたのは、2007年度に神戸学院大学で「行動人類学実習」という授業を非常勤で担当した時のことである。

非常勤講師自体は博士課程在学中からいくつかの大学でおこなっていたが、それは講義であって、フィールドワーク系の授業は神戸学院大学がはじめてだった。行先と時期については大学から指定があった。有瀬キャンパスの近くにある明石市大蔵町の稲爪神社で10月におこなわれる秋祭りに学生たちを参加させ、お神輿を担がせてほしいとのことだった。大学と地元地域との連携の様子を「絵」として残すという狙いがあったのだと思う。

授業としては、お祭りの様子を撮った写真を自分の好きな音楽と組み合わせて、町のプロモーションビデオを各人に作らせることを考えた。資料サイトの2-2で京都文教大学のフィールドワーク実習を紹介する動画を示したが、あれを学生に作らせようと考えたのである。

結果から言うと大失敗であった。

秋祭り前の授業は2回しかない。2回の事前授業であわてて稲爪神社の説明をおこない、また後で動画を作ること、だから写真を撮ること、地元の方に話しかけてメモを取ることを説明したが、それだけで学生が動けるはずがない。祭り当日、ぼんやりしている学生グループを捕まえては地元の人に引き合わせていったが、私が話すばかりで学生は沈黙、メモも取らない。後で確認したが写真も遠巻きに神輿を撮ったものばかりで、とても動画の素材には足りない。

学生のモチベーションも明らかに低かった。参加している人文学科の学生にとって、フィールドワークは学びに直接かかわるものではないのだから無理もない。「お神輿を担げば単位がもらえると聞きました」という学生が大半であった。たった2回の事前授業を2回とも欠席する学生もいた。また稲爪神社を事前に知っている学生もいなかった。神社がある大蔵町は、確かに地図上では大学の地元ではあるが、駅と学校をバスで行き来する学生にとっては行ったこともない「地元」である。

いちおう動画は作らせたが、写真を撮影順に並べて曲を流しただけ、説明テロップも入っていないような作品ばかりであった。写真の撮り方や動画編集の仕方を説明できなかった私が悪いのだが、しかし半期15回でそれらを学生に伝えるには、教材や授業の組み立てをもっと作りこむ必要があると思った。

翌年は動画制作はあきらめた。秋祭りについては感想を提出させるだけにして、残りの回は大学周辺

で「発見したもの」を、Google マップのマイマップ機能を使って写真付きで書き込んでいくという課題に変えた。1 年目よりは形になったが面白くはなかった。感想の方は、体験学習の感想として学生が書く定型文、すなわち「町の人々の温かさが伝わった」とか「伝統に触れることで新たな学びを得た」というものばかりであった。「発見」の方は、ネット検索で見つけた明石駅周辺の「おいしいお店」等の紹介ばかりであり、私が例示し期待もしていたような考現学的な視点のものはほとんどなかった。

このようなモチベーションの低い学生は、フィールドワーク系の授業が専門外の学生にも手軽な半期の授業、行きやすい大学地元での授業として提供されていけば——つまり私がいう「フィールドワーク系授業のリベラルアーツ化」が進んでいけば、必然的に発生するものだろう。フィールドワークの教育効果は京都文教大学での経験で分かっているが、問題はモチベーションの低い学生をそこにどう引き込むかである。

神戸学院大学での経験を経て浮上したこのテーマであるが、「行動人類学実習」は 2009 年、就職が決まったことを機に担当を外れた。モチベーションの低い学生を授業にどう引き込むかというテーマは、就職先である神戸山手大学で追及していくことになった。

### Ⅲ 「フィールドクリップ」と「フィールドコミック」

#### 1. 神戸の写真集を作る（神戸山手大学 2009 年度～）

神戸山手大学では、フィールドワーク系の授業を年 1～2 コマ担当した。カリキュラム変更に伴い名称が変わったり、コマが春秋 2 コマに増減したりしたが、最終的な名称は春学期の方が「神戸学フィールドワーク」、秋学期の方が「神戸文化研究」である。その名の通り、どちらも大学が位置する神戸の街について、フィールドワークを通じて理解を深めるという趣旨の授業である。地域の団体と連携した PBL 的な活動は後述（Ⅳ－1）するようにゼミでおこなった。この授業ではもっと軽い街歩き的なものが想定されている。

着任した 2009 年度、最初のフィールドワークで神戸の写真集（図 2）を作った。資料サイト 3－1 にリンクがあるので開いてみてほしい。

「はじめに」でこう書いた。「神戸の写真集といっても、ここには観光名所もおしゃれなお店も登場しません。私たちが撮り集めたのは、ただひたすらに神戸の日常です。日常の中に美しさをみつけること、神戸らしさを見つけること。それが今回のフィールドワークのテーマでした。」すなわち神戸学院大学では失敗してしまった街歩き写真への再挑戦である。

街歩き写真は有名店や観光スポットなど何か特別な被写体を撮ってくるのではなく、ありふれた光景を自分なりの切り取り方で面白くするものである。そのことを学生に理解してもらうため、フィールドワークに出る前に「さびしいもの」「美しいもの」などの抽象的なテーマを与えて学内で写真を撮らせ、教室でそれをプロジェクターに映し出し、何がどうさびしいのか、美しいのかを言語化する練習を重ねた。その成果は 1 枚 1 枚の写真につけられたキャプションや説明に表れている。私が合格を出すまでに何回も書き直しをさせたが、最終的には読み応えのある写真集になったと自負している。

また、資料サイト 3－1 には「コンパクトカメラでも格好いい写真を撮るための 6 つの基本」という文書へのリンクもある。神戸学院大学の授業で感じた学生たちの写真技術を改善すべく、このような文書を作って撮影の基礎を教えた。当時の携帯電話はカメラの性能が低く、大学で貸し出すコンパクトカメラを使うことを前提にこのような文書を作ったが、スマートフォンが普及し、コンパクトカメラがほとんど使われなくなってしまった今となってはあまり意味のない文書かもしれない。



神戸山手大学で良かったのは、大学のサーバーに教員が自由に使えるスペースがあり、このようにウェブサイトの形で成果物を公開することができたことである。宣伝は特にしなかったが、初対面の人から『『神戸のまわる音』、たまたま検索で出てきて見ました』と言われることもあり、成果物をウェブ上に公開することの効果を実感した。

ウェブ公開には別の効果もあった。作品として一定水準に達するまで、前述のようにかなりコメント文を書き直させたのだが、学生たちは「ウェブサイトとして残るのだからちゃんと書かないと」と言っていて途中で脱落することがなかった。もともとアクティブな授業で学生たちも楽しくやっている感じはあったが、こんな真剣な雰囲気になったのはウェブサイトの試作品を学生に見せた時からだった。自分たちの制作物がウェブ上で公開されることについて、具体的なイメージを抱けたせいだろうか。ウェブ公開と学生のモチベーションの関係についてはⅢ－3で再び検討する。



図2：写真集のウェブサイト



図3：フィールドクリップのサイト

## 2. 神戸のフィールドクリップを作る（神戸山手大学 2011 年度～）

2011 年度、大学のパソコンに動画編集用のソフト（Coral VideoStudio）を入れてもらえたこともあり、神戸学院大学の時はうまくいかなかった動画の作成にもう一度挑戦してみることにした。

街で撮り集めてきた写真に、その過程で住民に聞いた話、後で調べたことなどをテロップで入れながら、自分の好きな音楽に乗せて紹介していく動画——フィールドワークで作る街のミュージッククリップという意味で、授業ではこれを「フィールドクリップ」という造語で呼ぶことにした。

資料サイト 3－2 にフィールドクリップの例がふたつ置いてある。これは学生とフィールドワークに行った後、今からどのような作品を作るのか、具体的なイメージを伝えるために私が先行して作ったものである。

こうした動画を学生に作らせるためには、何をどのように教えていけばよいか。試行錯誤を何年か重ねたが、やがて一定水準の作品を安定して作らせることができるようになった。資料サイト 3－2 に 2016 年度の学生作品を紹介するページ（図 3）へのリンクを置いている。最初にある「練習作品」については後で解説する。その次の「作品 #01」以降が学生の作ったフィールドクリップである。特に 2 年生の #01「花隈を歩く」、3 年生の #03「港とともに」、#05「てくてく」、4 年生の #08「はなくま GO」は出来がよかった。ぜひ再生してほしい。

このように、街歩き系のフィールドワークの成果物としてフィールドクリップを作らせることには、以下のようなメリットがある。

第1に、地域情報の発信手段として優れている。フィールドクリップによる街の紹介は、文章でのレポート等に比べ圧倒的に見やすく楽しい。第三者の目にもとりやすいだろう。「自分が発信したい神戸を動画にしよう」というのは授業の目的として学生にも示している。実際、2016年度のフィールドクリップは撮影場所となった花隈地区の地域イベントで上映され、たくさんのお客さん呼んだ。

第2に、フィールドクリップの作成は、学生の中にあるフィールドワーク経験の整理や言語化を自然な形で進める手段となる。音楽にはイントロ、Aメロ、サビという構造があるが、この構造をガイドラインとしながら、イントロやAメロでは地域の説明となる写真、サビではその学生が見せたい写真、面白いと思う写真を並べさせる。指示として伝えやすいし、作業も感覚的で進めやすい。また、各パートに並べた写真に説明や感想をテロップでつけていく作業は、作品の制作過程であると同時に、個々人のフィールドワーク経験を整理し言語化する過程となるだろう。この過程に学生を誘導するため、現場での撮影は動画ではなく写真に限定した。動画をソースにすると十数秒単位のブロックを置いても違和感がないが、画面に変化がない写真だとせいぜい2、3秒で切り替えていかないとおかしいし、それだけ頻繁に切り替えるなら音楽の構造やリズムに合わせた写真の選択や順番を考えなくてはいけなくなる。学生には「大学のノートPCが古く、動画をソースにするとフリーズするから」と説明してきたが、実際のねらいは経験の整理や言語化を自然に進めさせることにあった。

第3に学生のモチベーションがあがる。自分の好きな音楽に映像を付けていく作業は楽しいし、音楽が柱として通っているために、初めての動画作成でも思った以上に格好がつく。それは作業を進めるモチベーションとなる。

こうした作業を円滑に進めるために、フィールドワークの前にまずは学内で写真撮影の練習をさせ、それを「練習作品」という動画に組ませた。写真撮影の練習は3-1で紹介した通りである。「練習作品」については、前述の2016年度の作品紹介ウェブサイトの最初に置いてある。ここでは(1)写真の切り替えをリズムに合わせること、(2)写真のサイズで抑えるところ／盛り上げるところの緩急をつけること、(3)写真の切り替えにはカットバックやフェードなどの基本操作以外のエフェクトを使わないこと、を徹底させた。またフィールドワーク後も、行き当たりばったりで編集させず、設計図(資料サイト3-2にPDFのリンクを置いている)を各人に作らせ、どこでどの写真を使うか、写真の整理をしつかりさせてから編集に入らせた。学生たちの作品は、そうやって作成させたものである。

メリットの多いフィールドクリップの作成であったが、しかし授業としては2016年度を最後に中止してしまった。著作権の問題が解決できそうになかったからである。

「自分の好きな曲」を使って作ったフィールドクリップは、教室の中で作品を見せ合うだけなら「授業過程における使用」にあたり問題はないが、外部に発信するためにウェブサイトへアップすれば著作権の問題が発生するだろう<sup>注7</sup>。正式な使用許可を取ると相当な金額になるため、対策として私が作った曲を使わせたり(資料サイト3-2にリンク)、アマチュアのボーカロイド曲を作者に許可をもらって使ったり、フリー音源の曲を使ったりしたが(2016年度学生作品の#08、#09)、やはり「自分の好きな曲を使う」ことが学生のモチベーションにつながっている以上、この点は如何ともしがたい。教え方のノウハウを積んできたのに惜しい気もしたが、結局フィールドクリップの製作は中止し、ネット上からも削除した。今回、この論文のために再びアップロードしたが、音楽トラックはミュートしてある。

### 3. 神戸のフィールドコミックを作る(神戸山手大学 2014年度～)

2014年度から、もうひとつフィールドワーク系の授業を持つことになった。フィールドクリップと重



ならないような内容として考えたのが、フィールドで撮ってきた写真を組み合わせて漫画を作る「フィールドコミック」である。

資料サイト3-3に学生が作った作品へのリンクを置いている(図4)。見ての通り写真をコマに割り付け、セリフや擬音を付けて数ページの作品にしたものである。漫画という形式を与えられると、学生は右上の導入から左下のオチまでの「ストーリー」として自分のフィールドワーク経験を自然に整理していく。その点はフィールドクリップと同じだが、フィールドコミック独特の指導もある。たとえば淡々とした説明だけで終わってしまっている学生には、自分の代理となるキャラクターの画像を貼り付けさせると、より踏み込んだ感想や本音をセリフとして書いてくれるようになる。また、大小の差をつけたコマ枠だけを与えるだけで、学生は小コマに入れる説明の写真と大コマに入れる見せたい写真とを自分で考えてくれる。漫画というものは、本当にすばらしい表現形式である。

編集に使うソフトも、最初はイラストレーターを使っていたが、やることを整理していけば、説明書(資料サイト3-3にPDFへのリンク)に示す通りワードで十分である。また地域情報の発信手段としてもフィールドクリップより細かい情報を織り込めるため実効性が高い<sup>注6</sup>。

さらに作りやすく読みやすいフィールドコミックの形もある。資料サイト3-3にある「スマホ用レイアウト」を開くと、スマホでスワイプしながら閲覧することに特化した同サイズのコマが縦に並ぶ形式のフィールドコミックが見られる。正確にはフィールドコミックではなく、IV-2で述べるゼミのウェブマガジンの記事の一つとして学生に作らせたものだが、コマのサイズが決まっている分こちらの方が作りやすいし、スマホでも読みやすいものになっている。



図4：フィールドコミックの例

フィールドクリップにせよフィールドコミックにせよ、その根本的なねらいは、フィールドでの体験の整理や言語化に学生を自発的に引き込むことにある。感想レポートのような文章でその作業をするのは、よほど優秀な学生でない限り難しい。II-3で述べた定型文的な感想は、II-1で述べた文化人類学者の立場からいえば、フィールドワークの前にあらかじめ自文化で用意されていた概念にあたる。それを並べても、異文化で体験した全体性を整理したり言語化する作業にはならないだろう。

フィールドクリップやフィールドコミックの作成は面白い。面白いから自発的に取り組んでくれる。取り組めば、それが体験の整理や言語化につながる仕掛けが内包されている。体験を作品としてうまく

整理・言語化できるかには個人差があるが、少なくともみんな、自分の体験を自分の頭で考えてくれる。

また、Ⅲ－１の写真集の制作でも感じたことだが、制作物を集めてウェブサイトにするという最終目標は、学生のモチベーションの向上に大きな効果を上げる。もともと学外に出たり編集作業をしたりというアクティブな授業で、学生は楽し気だったが、楽しいだけではなく、一定水準に達するまで厳しく作り直しを命じてあきらめずに作業をしてくれた。学生がいうには「ウェブサイトになるのだからちゃんとやる」とのこと。「地域の人に見られるから」というわけでもなく、とにかく「ウェブサイトになる」ということに緊張感ややりがいを感じているように思えた。インスタグラムや TikTok などに日々投稿をしている世代なのに、ウェブサイトはまた違うということなのだろうか。

ともあれ、成果物をウェブサイトとして公表するという目標を示すことで、学生のモチベーションが上がることには実感がある。逆に考えると、かつて神戸学院大学の授業で悩まされた学生のモチベーションの低さは、成果物を「教員しか読まない感想レポート」という低いレベルに設定していたことに原因があったのかもしれない。

#### Ⅳ 「引継ぎ型の PBL」と「失敗可能な PBL」

##### 1. 花隈地区でのゼミ活動（神戸山手大学 2017 年度～）

大学から徒歩 15 分ほどの位置に花隈という古い町がある。花隈では 2016 年より「モダンタウンフェスティバル」という地域活性化のためのイベントがおこなわれているが、第 1 回のイベントにフィールドクリップの上映会という形で参加したことがきっかけで（Ⅲ－２参照）、翌 2017 年からは私のゼミ（2 年生の課題研究）もこのイベントに何かブースを企画し、出展することを依頼された。

私は文化人類学者であると同時に、情報処理技術者の資格も持っている。この少し珍しい来歴を活かし、ゼミでも「コンピューターを使った地域文化の展示や発信」をテーマとして、民族家屋の AR 表示システムや、電話帳をデータにした市区町村別の名字分布、神戸のスイーツを紹介するプロジェクト・マッピング、平均所得が不思議に高い村について QR コードから説明動画が見える地図などを、学生と一緒に作ってきた（資料サイト 4－1）。

花隈のイベントでも、学生たちのアイデアを私がプログラミングで実現するという流れを考えていたが、そのアイデアを出させるためには花隈の住民たちの声を聴かねばならず、そのためには花隈という地域についての事前学習が必要であった。事前学習として花隈の解説をしたが、学生の反応は鈍かった。無理もない。花隈は大学の地元ではあるが、ほとんどの学生は行ったこともない地域である。

不安を抱えつつ、花隈に学生を連れていく日になった。ここではイベントを主催しているモダンタウン協議会の方々の案内で町を歩いた。この時、かつては料亭が立ち並び、芸者さんが行きかう町として栄えた花隈の歴史を実地で知ったこと、また町の大人たちからブース出展について直々に、また若い世代を呼べるような企画にしてほしいと具体的に依頼されたことで、学生たちが急に活性化しはじめた。同じ情報は事前学習として私からも与えていたのだが、実際に町に行き、町の人から説明されることの効果は大きかったようである。

企画会議ではふたつのアイデアが出た。ひとつは花隈の歴史を楽しくアピールする手段として、昔の写真の中に入って記念写真を撮ってインスタなどで拡散できる装置である。言われたものを私がプログラムした（図 5）。USB カメラの前に立つと、昔の花隈の風景と前景レイヤーである芸者さんの間を自由に動ける。ポーズを決めたところでその画像をプリントアウトする。一緒に印刷された QR コードから画像をダウンロードすれば SNS での拡散も容易である。この装置は「タイムスリップカメラ」と名

付けた。もう一つは子供向けの工作ワークショップである。小さな子供が来ればその若い親も来るだろうという考えである。こちらは完全に学生主導で準備を進めさせた。こうした準備の様子や当日の盛況ぶりは、後に学生たちがパワーポイントにまとめ、4月、新入生の前でプレゼンした。資料サイト4-1に発表時の動画を置いてあるのでぜひご覧いただきたい。

終わってみればうまく課題解決型学習——PBLのかたちになったと思う。続く2018年、2019年のゼミも花隈のイベントに参加した。前年の反省や町の人々の評価を聞きながら、工作の内容など細かい点をよりブラッシュアップしていった。こうしたゼミ活動から派生して、花隈近辺にある老人ホームがおこなっているこども食堂に工作作りでかかわる学生たちも現れた（資料サイト4-1参照）。

このように学生のモチベーションがあがっていったきっかけは、やはり早い時期に町の人に接触させたことだろう。2018年、19年のゼミでは事前学習をさせる前に、とりあえず町に連れて行ってしまった。そこでモチベーションが上がったところで事前学習をおこない、そのうえで改めて町に出るというやり方が効果的なパターンであることが確認できた。フィールドが大学近隣にあるなら、また何度も調査に出る回数のゆとりがあるなら、事前学習の前に町の人と接触させることを目的にした「予備調査」をおこなうことはおすすめできる。

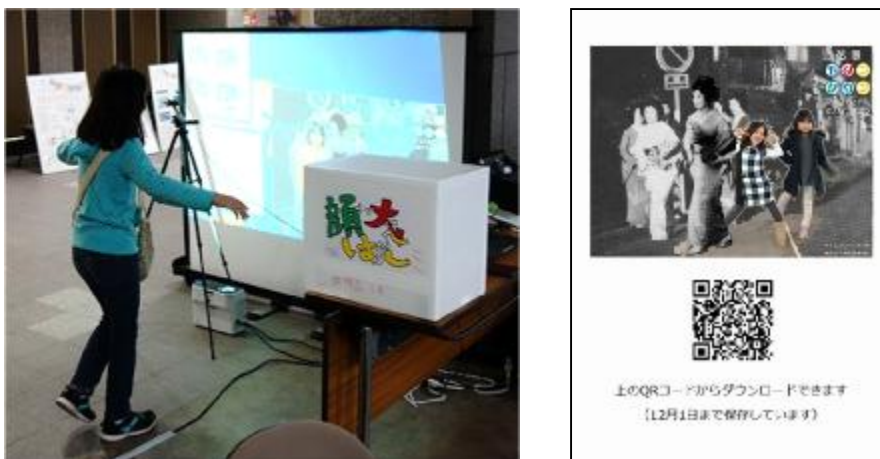


図5：地域イベントにゼミで出展した「タイムスリップカメラ」

## 2. 宇治川商店街でのサービ斯拉ーニング（関西国際大学 2021 年度～）

関西国大学との合併に伴い、2021 年度から新たに「サービ斯拉ーニング」を担当することになった。サービ斯拉ーニングは、学外でのボランティア活動などを通じて将来のキャリアに続く体験学習をさせるという趣旨の授業であり、近年は多くの大学に設置されている。

私がサービ斯拉ーニングのカウンターパートをお願いしたのは、花隈の西隣にある宇治川商店街である。花隈のイベントがコロナ禍でストップしてしまったこともあるが、宇治川商店街で若い店主たちが取り組んでいる様々な活性化策、特に10月の「宇治川音楽祭」は小さな商店街とは思えない規模のものであり、学生たちにぜひ参加させたいと思ったからである。

音楽祭の実行委員長である平井兵庫氏からは、音楽祭の会場設営や会場整理に学生ボランティアを出すことをお願いされていた<sup>注8</sup>。それだけで体験学習にはなるが、しかしそれだけでは足りない気もした。自分たちで調査をして、課題を見つけ、対策を考えて企画を立て、実施をする、つまりPBLの形にまで

もっていかないと体験も深まらないのではないか。「町の人たちの温かさを感じた」のような浅い感想、Ⅱ－３で「定型文」と呼んだような感想しか引き出せないのであれば、体験学習が形骸化してしまう。

宇治川商店街でのサービスラーニングを PBL 型に展開するため、私は音楽祭でのボランティア活動を「予備調査」と位置づけた。秋学期が始まって２回の授業の後、すぐに音楽祭の日になってしまうというスケジュールの都合もあるのだが、Ⅳ－１で述べたように、まず地域の人たちとの関係性を作ってしまう、そこでモチベーションをあげた上であらためて事前学習に取り組ませるという組み立てをしたのである。そのためサービスラーニングとしてはメインの活動になりそうな音楽祭のボランティアを、あえて「予備調査」に位置づけた。

その後の「事前学習」として、書籍から全国の地域活性化の事例をまとめさせ、発表させた。宇治川商店街や音楽祭に関する文献資料はほとんどないが、他地域の事例と比較する中で「宇治川ではどうなっているのだろう」という質問項目が集積されていく。この質問の束を抱え、再び商店街に調査に行くことも考えたが、コロナ禍で学外活動が制限されていたこともあり、代わりに平井氏を学校にお招きし、ロングインタビューを実施した。このインタビューが「本調査」の位置付けになる。

インタビューの後は学生同士の「座談会」をおこなった。インタビューや座談会は文字起こしをして、ウェブサイトとして仕上げた(図6)。成果物をウェブ発表することはⅢ－３で述べたように学生のモチベーションをあげる手段の一つである。

資料サイト4－2に、このウェブサイトへのリンクを載せている。見てもらえばわかるが、座談会はただ主観的な感想を言い合うレベルを超え、文献研究からインタビューへの流れで何が明らかになったのか、深く具体的な議論になっている。むしろその場でこんなに流暢に意見が言えたわけではない。文字起こしをした後、学生たち自身に自分のセリフをかなり「加筆訂正」をさせた。授業が終わった春休みまでこの加筆作業は続いたが、学生たちのモチベーションは高く、最後までうまく仕上げられた。

秋学期のサービスラーニングで学生たちが明らかにした、活性化をめぐる宇治川商店街の課題や可能性は、翌年春学期のサービスラーニングに引き継がれた。春学期のサービスラーニングは商店街が新しい活性化策として予定していた夏祭りに、自分たちで企画したブースを出展することを目的としている。企画会議の前に、現場への予備調査をおこなったが、加えて秋学期の学生の座談会を徹底的に読ませた。すなわち秋学期で調査、春学期で企画と実践というサイクルを作ってみたのである。



図6：サービスラーニングのウェブサイト



図7：ゼミのウェブマガジン



春学期のサービラーニングがどうなったかは、本叢書に所収の別の論文を参照してほしい<sup>9)</sup>。ともあれゼミと違い、半期しかないサービラーニングでは、調査から分析、企画、実施までの PBL を展開することは時間的に難しい。その欠点をこうした「引継ぎ型」の授業連携で埋め合わせてみたのである。また、事前学習の素材として同じ学生が調べ、考えたこと（座談会）を使うことは、受講生のモチベーションの向上に強くつながった感がある。

### 3. ウェブマガジンの作成（関西国際大学 2021 年度～）

花隈のイベントや宇治川でのサービラーニングを通じて PBL 型の授業に取り組む中で、ずっと気になっていたことがある。学生に「失敗をする自由」を与えられていないことである。

企画会議で出た案の中には、学生たちが「面白そう！」と盛り上がっていても、私の目からは失敗が目に見えているものや、地域の人々に迷惑をかけてしまいそうなものも多く、そうした案は却下せざるを得なかった。しかし本来なら、自分たちが考えたことを自分たちでやらせることで、たとえ失敗しても多くのものを得られるのが PBL のはずである。フィールドワーク系の授業で PBL を展開すると地域の人々の存在があるために、学生たちに「失敗をする自由」を与えられない。これは大きな問題だと私は感じてきた。

その反省から、2021 年度の 2 年生ゼミでは、特に中心的な課題としてウェブマガジンの作成に取り組んだ（図 7）。リンクを資料サイト 4-3 に置いてある。ぜひ読んでみてほしい。どの記事も大なり小なり失敗だらけなのだが、開き直ってそれをネタにしたかなり面白い読み物に仕上がっていると自負している。

指導のポイントはいくつかあった。時系列に沿っていうと、まず 4 月の時点で学生に周知徹底したのが記事の企画の方向性である。

自分で取材してきたことを雑誌風に仕上げるという課題は、フィールドクリップの制作をやめた 2017 年度以降（Ⅲ-2 参照）、秋学期のフィールドワークの枠で何度か実施してきたのだが、「神戸にかんする記事なら何でもよい」という指示では、学生は「おいしいパン屋」とか「おすすめ観光スポット」といった取材企画を提出してしまう。「地元の取材」といわれても、タウン誌で見たような記事しか連想できないようである。「タウン誌の劣化コピーを作っても意味がない。あなたにしか書けない記事を考えなさい」というと、今度は「おすすめの学食メニュー」「〇〇先生にインタビュー」といった学内新聞のような企画を出してくる。これも違う。特定グループ内の会報ではなく、あくまでもマスに向けた「雑誌」を作りたいのだ。外部の人が読んでも面白いと思える神戸の記事を考えなさいと指示し、そうした雑誌の例として、神戸を独自の視点で切り取る『YURARI』を紹介、その編集者である竹内明久氏にも来ていただいたりした<sup>10)</sup>。ようやく指示は伝わったようで、面白い記事を書きあげた学生もいたが（資料サイト 4-3）、多くの学生は「わかってはいるが、どうやってそんなネタをみつけたらいいのかわからない」という段階にとどまってしまった。

この時の反省から、ゼミでは企画を立てる練習として「ムリすじレビュー」という記事を書かせた。自分以外の誰にも支持されないであろう物品を、それでも無理やり他者に勧めるものである。あわせてこのレビューは発表し、他の学生から「いや、この勧め方には無理があるだろう」という印象を数値（「ムリすじ指数」）で付けてもらうこと、それが成績の一部になることを説明した。この課題は、自分にしか書けない対象の記事にしてもらうこと、また他人がみても面白くないものを切り取り方、書き方で面白くすることを理解してもらう上で効果的だった。資料サイト 4-3 に、この時のレビュー例をいくつか

紹介してある。

こうしてこのゼミで書かせたい記事の方向性を理解してもらった上で、いよいよウェブマガジン第1号用の企画を学生たちに提出してもらった。様々な取材調査、実験や挑戦の企画が出てきたが、学生の安全や地域の人々への迷惑にかかわる部分に手を入れた以外はできるだけそのまま通した。「こうしたらもっと面白くなる」という指導はしたが、「これは失敗するだろうな」という箇所はあえてそのまま残した。学生の企画に関しては、失敗が目に見えている部分も込みでそのまま通すのが、企画段階での指導ポイントだった。

取材などの時間は特に授業内ではとらず、放課後や休日などに勝手にやりなさいと指示した。定期的な進捗報告は授業内でさせたが、自分たちで立てた企画だけあって学生たちは楽し気に取材や調査を進めてくれた。取材段階での指導ポイントとしては、学生の様子をみながらではあるが「これもやってみよう」「もっとサンプルを取ろう」とどんどん作業を上積みさせていった。こういう記事は徹底的に調べることで面白さが生まれるためである。学生もこの感覚は理解して、指導についてきてくれた。

指導が大変だったのは文章のブラッシュアップである。最初に出させた記事は、記事というより授業のレポートであった。進捗報告でしゃべらせた時にはみんなを爆笑させていた面白さが、文章では何一つ発揮できていない。学生たちと原稿を何度もやりとりしながら、その面白さを引き出すような文章に仕上げていった。個々の学生の得意を活かして、イラスト中心にしたり（第1号「たい焼き 頭から食べるかしっぽから食べるか」など）、会話をそのまま文字起こししたり（第2号「ポテト論争 和解へのプロセス」など）もした。

苦労の甲斐あってかこのウェブマガジンは評判がよい。閲覧回数は計測できないのだが、Google 検索でたまたま見つけて開いてくれた回数、つまり授業と関係のない一般の人が見てくれた回数が 500 回以上ある。検索でも「神戸 自由研究」と入ただけで、のウェブマガジンがトップに来るようになった。

このようにウェブマガジンの作成は、学生が自分たちで課題（ネタ）をみつけ、取材や実験の方法を考え、文章やイラストとして記事に仕上げていったという意味で、PBL の一つの実践に位置づけられるだろう。サービスマーケティングのように地域の人や企業がかかわる PBL には、失敗が許されない緊張感や責任感があり、それはそれで高い教育効果があると思うが、一方でこのウェブマガジンのように自由にやってよい、失敗してもよい PBL は、学生の自主性を前面に出した、また別の教育効果があると考えられる。

2022 年度は2年ゼミを持たなかったが、2023 年度は再び2年ゼミでウェブマガジンの続きを作っていく予定である。

## V おわりに

冒頭で述べたように、かつては専門教育としておこなわれていたフィールドワーク系の授業は、その様々な教育効果が認知されるにつれ、学部学科にかかわらず多くの学生に、1・2年生のうちから履修を勧めるリベラルアーツ的な授業として展開されるようになった。この流れは望ましいものである反面、地元地域について知識も関心もないモチベーションの低い学生が、大量に履修する事態も引き起こす。彼らをうまくフィールドワークに引き込まなければ、せっかくの教育効果も意味をなさない。

モチベーションの低い学生をフィールドワークに引き込むため、現場の教員はどのような授業の組み立てをしているのか。将来的には全国の大学の事例を集積し、検討してみたいと考えているが、そうした展望への嚆矢として、本論文では私自身の試行錯誤を、うまくいった例もいかなかった例も含めて紹介してきた。



フィールドワーク系の授業は実施条件が千差万別であるので、私が紹介した「フィールドクリップ」や「フィールドコミック」「予備調査」「引継ぎ型 PBL」「失敗可能な PBL」などは、単純に応用できるものではないと思うが、これらを通観すると、学生を三つのものに「つなげる」ことがフィールドワークへの引き込みに重要なポイントになっていることがみえてくる。ひとつ目は、可能ならばまずは現地へ連れて行って地元の住民とつなげてしまうこと。二つ目は、前年度の成果物を次年度の事前学習に使うことで、授業を通年度的につなげていくこと。三つめは成果物をネットの世界につなげていくことである。

現在進行形で取り組んでいるテーマであるので、また考えや強調点も変わるかもしれないが、現時点ではこの三つの「つながり」の抽出を結論として論文を終えたい。

### 【注】

- 注 1 文部科学省 中央教育審議会「これからの大学教育等の在り方について（第三次提言）」  
([https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/004/gijiroku/attach/1338229.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/004/gijiroku/attach/1338229.htm))
- 注 2 立教大学より松崎半三郎奨学金を受け実施した。
- 注 3 ムラブリは野生の動植物の採集を生業として山中で移動生活を送る人々である。言語は独自のムラブリ語で、90 年代の推定では人口は 100 人程度であった。食料の乏しくなる乾季には山岳農耕民モン族の村に接近、畑仕事の手伝いをして報酬としてもらう食料で食いつないでいる。私の調査はモン族の村に滞在し、ムラブリの人々との接触機会を待つ形でおこなわれた。乾季におこなった 1 回目の予備調査では 3 つのバンド、21 人のムラブリと接触できたが、雨季におこなった 2 回目の予備調査では接触はできなかった。信仰面や雨季の間の生活などに不明点が多く興味深い人々であったが、彼らの移動生活に同行することは、持参できる食料や水の関係でせいぜい 2 泊が限度で、本格的な調査の目途が立たなかった。2000 年代にキリスト教系の団体によって定住化が進められたため、現在は移動生活をおこなっているムラブリはいない。
- 注 4 大和銀行（現りそな銀行）アジア・オセアニア基金からの資金援助を受けて実施した。調査ビザはパプアニューギニア大学の National Research Institute の研究員として取得した。
- 注 5 オクサブミンには、われわれの所有概念に近い「アンムティン」と同時に、代金を支払っても上書きされない「ニタ」という所有概念が併存している。たとえば私がある村人から缶詰を買ったとする。これで缶詰のアンムティンは私のものになったが、缶詰のニタは村人に残っており、そのためその村人が私の家に来て缶詰を食べさせろといったら、私は食べさせなくてはいけない。納得いかないが、村人いわく「お前も食べられるのだからいいではないか」とのこと。若者たちは、特に婚資の豚を集める時、またその後自分の家を建てる時に大量のニタを生み出し、その関係にがんじがらめにされていくが、これがオクサブミンにおける「一人前の大人になる」ということである<sup>8)</sup>。滞在初期、何も知らずに自分の家を建ててしまった私は、その後ニタの観念を実地で学んでいくことになった。
- 注 6 実際、フィールドコミック形式のルポルタージュは「デイリーポータル Z」などウェブマガジンなどで最近よく見かける。
- 注 7 授業での楽曲使用については、JASRAC の見解 (<https://www.jasrac.or.jp/info/school/>) と日本レコード協会の見解 ([https://www.riaj.or.jp/f/leg/copyright/education/qa\\_jugyou.html](https://www.riaj.or.jp/f/leg/copyright/education/qa_jugyou.html)) もかみ合っていないように思えてしまう。一番厳格な解釈に従ってネット上でのフィールドクリップの公開を中止した

が、その判断で正解だったのかはいまだにわからない。

注8 私が顧問をしているゲーム同好会が、神戸を題材にしたアクションゲームを作った際、そのお披露目の場所として宇治川音楽祭の片隅にブースを設置させてもらった(資料サイト4-2)。平井氏とはそれ以来の知り合いであった。

注9 竹内明久氏は元広告代理店勤務。2012年よりフリーペーパー『YURARI』の編集に携わる。『犬の目、人の眼差し』など神戸に関する著作も多い。神戸学院大学で新聞学の授業も担当。現在は波止場通信社代表。(https://www.facebook.com/profile.php?id=100057355874002)

### 【引用文献】

- 1) 高橋修・富田京子・猪股歳之、2017「フィールドワークを伴うプロジェクト型学習を核としたキャリア教育科目の開発」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第3巻、pp.253-256。
- 2) 原尻英樹、2005「フィールドワーク教育の実践とその教育的効果：コミュニケーション能力育成を中心にして」『静岡大学人文学部 人文論集』第56巻第1号、pp.73-108。および山田千香子、2014「フィールドワーク教育の方法と実践についてー長崎県のしまにおける15年の教育実践への考察ー」『長崎県立大学経済学部論集』第48巻第1号、pp.33-69。
- 3) 長谷川直樹、2020「大学教育でのフィールドワークによる地域に対する意識形成の効果に関する分析ー飯塚市中心市街地の事例研究ー」『日本建築学会技術報告集』第26巻 第62号、pp.421-417。
- 4) 中川修一、2019「『関係人口』からみた大学教育における地域フィールドワーク」『経済地理学年報』第65巻、pp.1-9。
- 5) 行木敬、2005「遺された者たちの『近代』：西パプア（イリアンジャヤ）における紛争の歴史と先住民ダニの現状」『講座 世界の先住民族：ファースト・ピープルズの現在 第9巻 オセアニア』明石書房。
- 6) 行木敬、2021「親族研究のパラドクス：文化人類学における親族概念の崩壊過程とその後の展開」『関西国際大学研究紀要』第23号、pp.187-202。
- 7) 行木敬、2006「物語の外側に棲むもの：ニューギニア高地中央部、オクサプミンにおける『白人の呪力』をめぐって」『東南アジア・オセアニア地域における呪術的諸実践と概念枠組みに関する文化人類学的研究』（科研報告書）。
- 8) 行木敬、2008「人生を切り分ける：婚資の豚と永遠の負債」『食文化誌ヴェスタ』2008年夏号、味の素食の文化センター
- 9) 南畑淳史ほか、2023 掲載予定「社会学科『サービスマーケティング』の実践報告」『関西国際大学 地域総合研究所叢書』